

加藤泉

《無題》



加藤泉(1969-)
《無題》
2016年
油彩・キャンバス
162.0×112.0cm
平成29年度購入
©2016 Izumi Kato

無

地の背景に、人と思われる大きな頭部が画面いっぱい描かれています。P100号(二六二×一一二センチメートル)のキャンバスですから、なかなかの迫力です。ほぼ正面を向いた顔の中から、ぎよろりとした大きな黒い目がちを向いており、思わずぎよつとしてしまっているようにも見え、どこか寂しげでもあります。

作者の加藤泉は、制作を始めた頃から、胎児のようだとも言われる独特な人物像を制作し続けてきました。描くときには筆を使わず、手袋をはめ、目の粗いキャンバスに絵具を手指で塗りこめるという方法をとりまします。そうして生み出される人物は、同じようなプロポーションをしていて、ほとんど表情がありません。身体が地面(キャンバスの下方)から植物のように生えていたり、時には、手などから植物の芽が出ていたりすることもあります。つまり、ヒト(動物)でありながら、植物のようでもあるのです。こうした特徴から、加藤の作品に描かれた人物は、しばしば「プリミティヴ(原始的)」、あるいは「野性」の存在などともとらえられてきました。

昨年度新たに収蔵したこの作品は、これまでの加藤の作品と比べて、異質さを放っています。初期の作品ではしばしば黒などの暗い色が全体を支配しており、

人物もその暗い画面の中に溶け込んでいきそうな印象を与えます。近年では明るい色を使うことが増えていますが、本作ではとりわけ、髪の毛が燃え上がるようなオレンジ色を映えていることから、この人物がエネルギーを内から外へ発散するような印象を与えます。一方で、頬から額にかけての緑や黄土色は、植物や土を思わせませす。つまり、ここに地面は描かれていませんが、人物の頭部全体に、それまでの作風をさらに発展させた形で、植物的なイメージが写し取られていると見ることができるところです。そのことを踏まえると、すつくと立ち上がる首は、木の幹のようにも見えてくるでしょう。

圧倒的な存在感を持ちながらも寂しそうに見える、暗く沈み込んでいきそうに見える内なるエネルギーを力強く発散しているようでもあり――。この複雑な表情からは、様々なことを読み取ることができそうです。細かな描写を取り除き、記号的に表現された人物は、現実離れしているようにも見えます。しかしこれは、現代に生きる、疎外感を抱えた私たち人間の姿を示しているのかもしれない。

じつと見つめているうちに、何かを語りかけてくるような気がしてこないでしょうか。

(美術課研究員 古館遼)